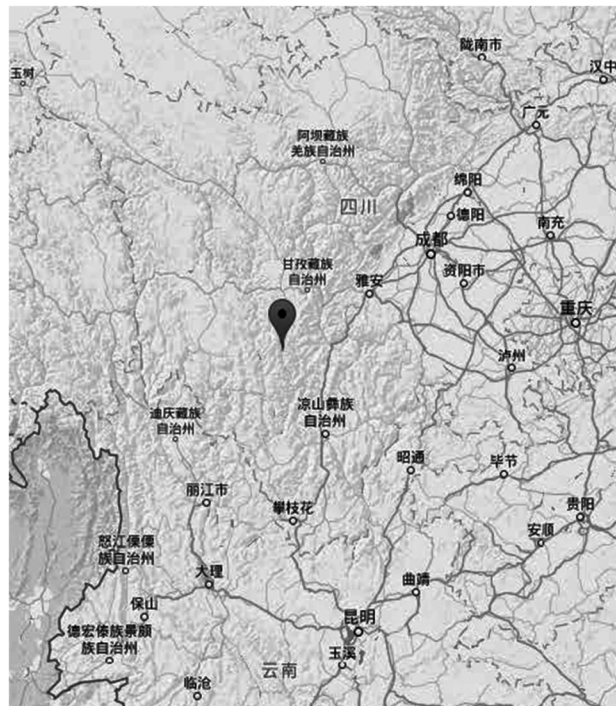


ムニャ語の名詞句

池田 巧

0. ムニャ語の概要

ムニャ語 (Mu-nya language ; 木雅語 ; *Mi nyag skad*) は、中国四川省甘孜藏族自治州の康定県から九龍県にかけて居住するチベット人の一部が話していることで、書記体系をもたない。話し手の人口は約 1 万人と推計されているけれども、実際には不明。話し手の族称はチベット族 (藏族 ; [pu³³pa⁵⁵] < Tib. *bod pa*) だが、他地域のチベット人と区別して自らを [mu³³na⁵⁵ vu³³] cf. Tib. *Mi nyag ba* と呼ぶ。この族称が歴史上の西夏を建国した主要民族名 *Mi nyag* と一致することから、その系統関係が注目されてきた。



バルーンは甘孜藏族自治州九龍県の湯古 (Thangmgo) 村を示す。
ムニャ語は名峰ミニャコンガ (*Minyang gangs dkar*) の周囲で話されている。

若い世代では漢語の四川方言、中年以上の世代ではチベット語カム方言も話す人が多い。今日では漢語からの影響が圧倒的であるけれども、ムニャ語に定着している借用語のほとんどはチベット語からのものである。ムニャ語を話す人々の社会背景と研究史については、IKEDA (2007) に詳述した。文法の概要は黄布凡 (1985: 1991: 2007: 2009 [修訂版]) および池田巧 (2010/2013), 語彙データは TBL と ZMC を参照されたい。

1. 複数表現

ムニャ語の名詞には、人称・性・数などの文法範疇を反映した形態変化はない。個別のものとして認識し得る‘人’ $\text{muw}^{33}\text{ni}^{55}$, 連続したものの一部である‘山’ mbo^{55} , 個別化するには容器が必要な‘水’ tɕu^{55} であれ、いずれも固定した語形である。これらの一般名詞に共通して用いられる複数形態素もない。この場合の複数形態素とは「名詞句の表す対象が複数であることを表示する形態素。この形態素を伴う主要部名詞を持つ名詞句は、複数個体を指示する。具体的な数量には言及しない」[SWD] ものを指す。

1.1. 一般名詞と数量表現

ムニャ語では、名詞にかかる数量表現は、名詞のあとに具体的な[数詞] + [量詞] あるいは[形容詞] を置いて示す。

ひとりの人	$\text{muw}^{33}\text{ni}^{55}$ 人	$\text{tɕ}^{33} = \text{zu}^{55}$ 1 = CLF
数人 (ひとりふたり)	$\text{muw}^{33}\text{ni}^{55}$ 人	$\text{tɕ}^{33} \text{ nu}^{55} = \text{zu}^{33}$ 1 2 = CLF
たくさんの人	$\text{muw}^{33}\text{ni}^{55}$ 人	$\text{ga}^{33}\text{j}^{55}$ 多い [形]
一群の人	$\text{muw}^{33}\text{ni}^{55}$ 人	$\text{tɕ}^{33} = \text{dɕ}^{55}$ 1 = CLF : 群
ひとつの山	mbo^{55} 山	$\text{tɕ}^{33} = \text{lɔ}^{55} / \text{tɕ}^{33} = \text{za}^{55}$ 1 = CLF / 1 = CLF
連山 (一、二峰)	mbo^{55} 山	$\text{tɕ}^{33} \text{ nu}^{55} = \text{za}^{55}$ 1 2 = CLF

山々	mbo ⁵⁵	ga ³³ ji ⁵⁵	
	山	多い [形]	
一杯の水	tɕu ⁵⁵	tɕ ³³	=p ^h o ³³ lɔ ⁵⁵
	水	1	=CLF : 碗
一滴の水	tɕu ⁵⁵	ʔe ⁵⁵ mi ⁵⁵	tɕ ³³ =ndu ⁵⁵
	水	わずか	1 =CLF : 滴
少量の水	tɕu ⁵⁵	ni ³³ ni ⁵⁵	tɕ ³³ =xe ⁵⁵
	水	少ない	1 =CLF
多量の水	tɕu ⁵⁵	ga ³³ ji ⁵⁵	tɕ ³³ =su ⁵⁵
	水	多い	1 =CLF

/=p^ho³³lɔ⁵⁵/ は‘碗’という名詞が量詞に転用されたもの。英語の a cup of water あるいは中国語の‘一碗水’にあたる表現。‘一滴の水’のフレーズに見える /ʔe⁵⁵mi⁵⁵/ は‘わずか’の意の形態素。副詞の /ʔe³³mi⁵⁵ tɕ³³ge⁵⁵/ ‘ほとんど／スレスレで’ という表現にも使われる。そのほかの量詞の由来は必ずしも明らかではない。‘少量の水’に見える量詞 /=xe⁵⁵/ は‘ひと掴み’にも用いられる。‘多量の水’に見える量詞 /=su⁵⁵/ は‘斗’‘尺’‘升’などに相当する（おおまかな）計量単位か。cf. /to⁵⁵-su³³/ ‘満たす’。

1.2. 代名詞の複数表現

ムニャ語の指示代名詞と第三人称代名詞は、主語に立つ場合や単独で発する場合を基本形とするなら、同じ語形であり、近称と遠称に空間を 2 分割して示す。第三人称代名詞は基本的に近称を用いるが、話し手から遠いところにいる「彼／彼女」について直示的に指示する場合には、遠称の語形を使うこともある。また文脈中に現れる「照応的」用法では近称を使うのが普通である。

[指示代名詞] (単数)	ʔe ⁵⁵ tsu ³³	(近称)	wo ⁵⁵ tsu ³³	(遠称)
	これ		あれ	
[人称代名詞] (単数)	ʔe ⁵⁵ tsu ³³	(近称)	wo ⁵⁵ tsu ³³	(遠称)
	彼 / 彼女		(遠方の) 彼 / 彼女	

ムニャ語には、代名詞に接続して複数を表す後置辞 /=nu⁵⁵/ がある。この後置辞を取ることで、代名詞は名詞から独立した品詞として認定ができる。

私たち	$\eta u^{33} = nu^{55}$	
われわれ (包括形)	$je^{33} = nu^{55}$	
あなたがた	$na^{33} = nu^{55}$	
この / あの ひとたち	$\eta e^{55} = nu^{55}$ (近称)	$wo^{55} = nu^{55}$ (遠称)

〔双数〕を表すには、人称代名詞と複数後置辞の間に数詞由来の形態素 /ni⁵⁵/ を挟む。

わたしたちふたり	$\eta u^{33} ni^{55} = nu^{33}$	
同 (包括形)	$je^{33} ni^{55} = nu^{33}$	
あなたたちふたり	$na^{33} ni^{55} = nu^{33}$	
彼 / 女ら ふたり	$\eta e^{33} tsi^{55} = nu^{33}$ (近称)	$wo^{33} tsi^{55} = nu^{33}$ (遠称)

第三人称双数のみ形態素 /ni⁵⁵/ の音節初頭子音が消えて三人称代名詞と融合し、母音交替として現れる特別な語形となっていることが注目される。これはミニャ語の三人称代名詞が指示代名詞と同じ語形であることに起因する。

主格に立つ基本形の単数 / 複数では、第三人称代名詞の「この / あの ひとたち」と指示代名詞の「これ / あれら」に形態上の区別はない。

この / あの ひとたち	$\eta e^{55} = nu^{55}$ (近称)	$wo^{55} = nu^{55}$ (遠称)
--------------	------------------------------	--------------------------

これ / あれら	$\eta e^{55} = nu^{33}$ (近称)	$wo^{55} = nu^{33}$ (遠称)
----------	------------------------------	--------------------------

しかし双数では異なる語形が使われ両者は区別される。

彼 / 女らふたり	$\eta e^{33} tsi^{55} = nu^{33}$ (近称)	$wo^{33} tsi^{55} = nu^{33}$ (遠称)
-----------	---------------------------------------	-----------------------------------

これらふたつ	$\eta e^{55} tsu^{33}$	$te^{33} = ndze^{55}$ (近称)
これ	1	= 双

あれらふたつ	$wo^{55} tsu^{33}$	$te^{33} = ndze^{55}$ (遠称)
あれ	1	= 双

このほか、人にかかわる表現において複数を表す後置辞 / $=nu^{55}$ / が使われる場合がある。

ひとさま (複数)	$ndzo^{55} = nu^{33}$
別	= SFX:pl.

cf. 他人（単数）	ndzø ⁵⁵	muw ³³ ni ⁵⁵
	別	人

この‘ひとさま’は、代名詞の複数接尾辞 /=nuw⁵⁵/ が形態素として使われた複合語と考えられる。しかし複数の人を示す複合語やフレーズであっても複数を表す後置辞 /=nuw⁵⁵/ は必須ではない。

人それぞれ	muw ³³ ni ⁵⁵	me ³³ me ⁵⁵
	人	おのおの

ひとりひとりの人	muw ³³ ni ⁵⁵	te ³³	=zuw ⁵⁵	tɕ ^h u ³³ mu ⁵⁵
	人	1	=CLF	それぞれ

ふたり	nuw ³³	=zuw ⁵⁵
	2	=CLF

2. 量化表現

ムニャ語は量詞（類別詞）が発達しており、種類も多い。名詞句を構成する量化表現において〔名詞〕と〔数詞＋量詞〕の語順は日本語の「一冊の本」；中国語の‘一本书’などとは異なり、ムニャ語では〔名詞〕←〔数詞＋量詞〕の構造をとる。

2.1. 具体的な数量を表す表現

「名詞句の表す対象の具体的な数量を特定する数詞を含む表現：日本語の「1冊の」「2冊の」「何冊の」などにあたる」〔SWD〕フレーズは、ムニャ語では以下のとおりである。

1 冊の本	ɣũ ⁵⁵ ndu ³³	te ³³ =pu ³³ ti ⁵⁵
	本	1=CLF : <Tib. <i>po ti</i> ‘帙’
2 冊の本	ɣũ ⁵⁵ ndu ³³	nuw ³³ =pu ³³ ti ⁵⁵
	本	2 =CLF : <Tib. <i>po ti</i> ‘帙’
1 冊（個）のノート	tʂẽ ³³ mbu ⁵⁵	te ³³ =lɔ ⁵⁵ / te ³³ =za ⁵⁵
	ノート	1 =CLF / 1 =CLF

2 冊 (個) のノート	$t\check{s}\tilde{e}^{33}mbu^{55}$	te^{33}	$=nd\check{z}\epsilon^{55}$
ノート	1		= 双

ノートは、漢語‘帳簿’ *zhàngbù* からの借用語と考えられる。現在の書籍とノートはともに冊子形態であるが、量詞が異なる。これは、両面印刷の横長の紙を重ね、綴じずに紐で括って帙に収めた伝統的なチベット本と、長方形の紙の端を糸で綴じた中国の線装本の形態の違いが反映しているからである。書籍の量詞はチベット語の *po ti* ‘帙’ からの借用語で、ノートには‘個’にあたる汎用の量詞が使われている。面白いことに本の場合には $nu^{33}=pu^{33}ti^{55}$ ‘2 冊’ で数詞に $/nu^{33}/$ が使われるのに対し、ノートの場合には、 $*/nu^{33}=lo^{55}/$ ‘2 個’ とは言えず、 $/te^{33}=nd\check{z}\epsilon^{55}/$ (直訳は‘1 対’だが、ペアに限らず‘ふたつ’の意) を使う。ムニャ語の数量表現においては $*/nu^{33}=lo^{55}/$ ‘2 個’ が $/te^{33}=nd\check{z}\epsilon^{55}/$ ‘1 対 (ふたつ)’ に取って代わったという歴史的変化の傾向が認められるが、概数の場合には $/nu^{33}=lo^{55}/$ という [数詞 + 量詞] の組合せも使われる。

数冊のノート	$t\check{s}\tilde{e}^{33}mbu^{55}$	te^{33}	$nu^{55}=lo^{33}$	~	ηe^{33}	$t\check{c}^hi^{55}=lo^{33}$
ノート	1	2	=CLF	5	6	=CLF

「数冊のノート」の直訳は‘ノート 1, 2 冊’あるいは‘ノート 5, 6 冊’で、概数はふたつの数字を併記して表現する。なお数量を訊ねる疑問文は、訊ねたい数詞の箇所を疑問詞に置き換え、適切な量詞をつけて訊ねる。

(1)	na^{55}	$t\check{s}\tilde{e}^{33}mbu^{55}$	$fi^{33}tsi^{55}$	$[~\chi e^{33}ti^{55}]^1$	$=lo^{33}$	$ndza^{35}$	$\eta e^{33}?$
	あなた	ノート	疑問: 何		=CLF	ある	DEC
	何冊のノートを持っていますか?						

2.2. 数量の範囲を示す表現

具体的な数量を提示せずに「名詞句の表す対象の、数量の範囲 (多少, 全体の中の割合など) を表す表現: 「多くの」「わずかな」「すべての」「ほとんどの」「いくつかの」に当たるもの」[SWD] は、ムニャ語では [名詞] ← [形容詞] $/=tsu^{33}/NMLZ$ の構造をとる。

すべての本 (各冊)	$y\ddot{u}^{55}ndu^{33}$	$me^{33}me^{55}$	$=tsu^{33}$
本	本	おのおの	= NMLZ
すべての本 (まとめて)	$y\ddot{u}^{55}ndu^{33}$	$t\check{c}^hu^{33}t\check{c}u^{55}$	$=tsu^{33}$
本	本	すべて	= NMLZ

¹ 疑問詞 ‘何’ は、湯古 (*Thangmo*) 方言では $[fi^{33}tsi^{55}]$ 生古 (*gSer'go*) 方言では $[\chi e^{33}ti^{55}]$ と発音する。

ほとんどの本 $\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33} \quad ge^{33}d\dot{z}\ddot{a}^{55} \quad = tsu^{33}$
 本 ほとんど = NMLZ

少しの本 $\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33} \quad ni^{33}ni^{55} \quad = tsu^{33}$
 本 少ない = NMLZ

たくさんの本 $\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33} \quad ga^{33}ji^{55} \quad = tsu^{33}$
 本 多い = NMLZ

(2) $mu^{33}ni^{55} \quad ka^{33}ka^{55} \quad te^{33} \quad = zu^{55} = ji^{33} \quad \eta u^{55} = le^{33} \quad tu^{33} - tu^{55} \quad pi^{33}.$
 人 ある 1 = CLF = AGT 私 = DAT DIR- 教える SFX: 未然
 あるひとりの人が教えてくれます。

(3) $\gamma e^{55}tsu^{33} \quad = ji^{55} \quad mo^{33}mo^{55} \quad so^{33} = l\emptyset^{55} \quad \dot{h}a^{33}ndzu^{55} \quad r\Lambda^{33}.$
 彼 / 女 = AGT 蒸餃子 3 = CLF DIR- 食べる DEC: 完了
 彼 / 女は 3つの蒸餃子を食べた。

3. 所有表現

次に所有表現を見ておきたい。1.「私の本」のような人称ごとの単純な所有関係と、2.「あの金持ちの服」のように特定化された名詞句を含む所有関係に分けて検討する。いずれの場合にもムニャ語では所有関係を表す助詞が、代名詞あるいは複数後置辞に融合する現象が見られることが特徴的である。

3.1. 代名詞を使う単純な所有関係の表現

「人称の区別を担うもの:日本語の「私(たち)の」「あなた(たち)の」「彼(女)(ら)の」および「誰の」「誰かの」などに当たるもの」[SWD]は、ムニャ語では[代名詞＝属格助詞]→[名詞]の構造をとる。なお[代名詞＝属格助詞]には、分析型と融合型がある。

	[分析型]	[融合型]
私の服	$\eta u^{55} = \gamma a^{33} \quad ts^h\ddot{e}^{33} \quad ngu^{55}$	$nga^{55} \quad ts^h\ddot{e}^{33} \quad ngu^{55}$
私の手	$\eta u^{55} = \gamma a^{33} \quad ri^{55}$	$nga^{55} \quad ri^{55}$
君の服	$na^{55} = \gamma a^{33} \quad ts^h\ddot{e}^{33} \quad ngu^{55}$	$na^{55} \quad ts^h\ddot{e}^{33} \quad ngu^{55}$

君の手	$na^{55} = ya^{33} ri^{55}$	$na^{55} ri^{55}$
彼 / 女の服	$?e^{55} tsu^{33} = ya^{33} ts^{h\check{e}^{33}} ngu^{55}$	$?e^{55} tsa^{55} ts^{h\check{e}^{33}} ngu^{55}$
彼 / 女の手	$?e^{55} tsu^{33} = ya^{33} ri^{55}$	$?e^{55} tsa^{53} ri^{55}$

3.2. 特定化された名詞句を含む所有関係

「特定のな名詞句を含むもの：日本語の「彼の弟の」「あの先生の」などに当たるもの」[SWD] は、ムニャ語では（[指示詞]）[[（代）名詞＝属格助詞] → 名詞＝属格助詞] → [名詞] の構造をとる。

私の母の服	$ngu^{55} = ya^{33} e^{33} me^{55} = ya^{33} ts^{h\check{e}^{33}} ngu^{55}$ [分析型]
私 = GEN	母 = GEN 服
	$nga^{55} e^{33} ma^{53} ts^{h\check{e}^{33}} ngu^{55}$ [融合型]
私 [GEN]	母 [GEN] 服

後者の「融合型」では、1 人称代名詞属格 ‘私の’ $/nga^{55} / < ngu^{55} = ya^{33}$ [GEN] のほかに、‘母の’ $/e^{33} ma^{53} / < e^{33} me^{55} = ya^{33}$ [GEN] にも属格助詞との融合が見られる。親族呼称は、使用状況が人称代名詞に近いからであろう。代名詞の複数後置辞 $/=nu^{33}/$ にも同様に属格助詞との融合型 $/=na^{33} / < =nu^{33}$ [pl.] $= ya^{33}$ [GEN] が³ある。

この金持ちたちの服	$?e^{55} tsu^{33} ngu^{55} ndzu^{33} mi^{33} = na^{33} ts^{h\check{e}^{33}} ngu^{55}$
これ 金 ある 人 = SFX [pl.+GEN] 服	
この裕福な人たちの服	$?e^{55} tsu^{33} t\theta^{55} mee^{55} = na^{35} ts^{h\check{e}^{33}} ngu^{55}$
これ 裕福 = SFX [pl.+GEN] 服	
裕福な人	$mu^{33} ni^{55} t\theta^{55} mee^{55} = tsu^{33}$ (単数)
人 裕福 = NMLZ	
裕福な人	$mu^{33} ni^{55} t\theta^{55} mee^{55} = nu^{33}$ (多数)
人 裕福 = SFX [pl.]	

このように複数後置辞 $/=nu^{33}/$ は、 $/=tsu^{33}/$ と同様に、[名詞] ← [形容詞] の後に置かれて名詞句を作る働きをもつ。指示詞を含む名詞句の構造については、次節を参照。

4. 指示表現

指示表現は「名詞句の表す対象の、「話し手」の「聞き手」に対する位置関係や遠近の度合いを表したり，聞き手に選択肢の中から選択を求めたりする表現：日本語の「こ（れら）の」「あ（れら）の」；「どの」「どちらの」に当たるもの。具体物を指示する「直示的」用法と，文脈中に現れた名詞句を指示する「照応的」用法がある」[SWD]が，ムニャ語では[指示詞]→[名詞]の直接修飾構造をとり，指示詞の後には属格の助詞を介さない。

ムニャ語の[指示詞]は近称と遠称の2種類で，「照応的」用法には近称が使われる。指示詞は人称代名詞と同じ語形である。指示表現の「この本」と所有表現の「彼の本」とは，属格助詞/=ya³³/の有無で区別される。

この本	ʔe ⁵⁵ tsu ³³ yũ ⁵⁵ ndu ³³	
cf. 彼 / 女の本	ʔe ⁵⁵ tsu ³³ = ya ³³ yũ ⁵⁵ ndu ³³	[分析型]
	ʔe ⁵⁵ tʂa ⁵⁵ yũ ⁵⁵ ndu ³³	[融合型]
あの本	wɔ ⁵⁵ tsu ³³ yũ ⁵⁵ ndu ³³	
cf. 彼 / 女の本	wɔ ⁵⁵ tsu ³³ = ya ³³ yũ ⁵⁵ ndu ³³	[分析型]
	wɔ ⁵⁵ tʂa ⁵⁵ yũ ⁵⁵ ndu ³³	[融合型]
どの本	χe ⁵⁵ tsu ³³ yũ ⁵⁵ ndu ³³	
cf. 誰の本	ɦa ⁵⁵ nu ³³ = ya ³³ yũ ⁵⁵ ndu ³³	[分析型]
	ɦa ⁵⁵ na ³³ yũ ⁵⁵ ndu ³³	[融合型]
これらの本	ʔe ⁵⁵ nu ³³ yũ ⁵⁵ ndu ³³	
cf. 彼 / 女らの本	ʔe ⁵⁵ nu ³³ = ya ³³ yũ ⁵⁵ ndu ³³	[分析型]
	ʔe ⁵⁵ na ³³ yũ ⁵⁵ ndu ³³	[融合型]

あれらの本

wo⁵⁵nu³³ γũ⁵⁵ndu³³

cf. 彼 / 女らの本

wo⁵⁵nu³³ = ya³³ γũ⁵⁵ndu³³ [分析型]wo⁵⁵na³³ γũ⁵⁵ndu³³ [融合型]

このほか、「机の上の本」のように具体的な位置を示す表現も、属格助詞 /=ya³³/ を使って主名詞を修飾する。

机の上の本

 tʂoo⁵⁵tsi⁵⁵ = pu³³ = ya³³ γũ⁵⁵ndu³³
 机 = 上 = GEN 本
/tʂoo⁵⁵tsi⁵⁵/ < Chn. zhuōzi 桌子

5. 名詞的修飾表現

名詞が修飾語となる表現は「主名詞を修飾する表現のうち、名詞（句）そのもの、あるいは [名詞（句）] + [主名詞に対する関係を表示する形態素] の組合せからなるもの」[SWD] で、ムニャ語では、名詞的修飾語は中心となる主名詞に前置されるが、臨時的な修飾関係や所有・所属関係では属格助詞 /=ya³³/ を必要とする。[名詞] → [名詞]あるいは [名詞] /=ya³³/ → [名詞] のような構造になる。たとえば、‘外国の本’にあたる表現には数種類があり、属格助詞 /=ya³³/ を必要とするもの、省略できるもの、使わないものがある。

外国の本

we³³kwe⁵³ = ya³³ γũ⁵⁵ndu³³/we³³kwe⁵³/ < Chn. wàiguó 外国tɕ^hi³³dza⁵³ (= ya³³) γũ⁵⁵ndu³³/tɕ^hi³³dza⁵³/ < Tib. *phyi rgyal* ‘外国’jã³³ru⁵⁵ γũ⁵⁵ndu³³/jã³³ru⁵⁵/ < Chn. yáng rén 洋人

修飾語と中心語の結びつきが固定的で熟語化している場合には、属格助詞 /=ya³³/ はつかない。

中国語の本	$\text{ka}^{55} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}$	$/\text{ka}^{55}/$ ‘漢’
チベット語の本	$\text{pu}^{55} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}$	$/\text{pu}^{55}/ < \text{Tib. } \textit{Bod}$ ‘チベット’
仏典；経典	$\text{tɕ}^{\text{h}}\text{ø}^{55} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}$	$/\text{tɕ}^{\text{h}}\text{ø}^{55}/ < \text{Tib. } \textit{chos}$ ‘法’

「こどもの本」の場合には臨時の結びつきであり、熟語化していないので、属格助詞 $/=\text{ya}^{33}/$ が必要である。

こどもの本	$\text{za}^{33} = \text{na}^{35}$	$\text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}$
	$/=\text{na}^{33}/ < =\text{nu}^{33} [\text{pl.}] = \text{ya}^{33} [\text{GEN}]$	

この表現は日本語の「こどもの本」と同様に‘こどもが見る本’つまり「児童書」と‘こどもの所有物である本’というふたつの解釈可能性がある。ムニャ語には、属格助詞 $/=\text{ya}^{33}/$ を省いて熟語化した「児童書」に相当するであろう $*/\text{za}^{33} = \text{nu}^{55} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}/$ ‘？こどもたち本’あるいは $*/\text{za}^{33} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}/$ ‘？こども本’といった表現はないという。ちなみに「こどもの読む本」は、次項で扱う動詞的修飾表現であるが、 $[\text{名詞}] = \text{ya}^{33} \rightarrow [\text{名詞句: 動詞} = \text{NMLZ}] = \text{ya}^{33} \rightarrow [\text{名詞}]$ のように名詞的修飾表現を重ねた形となり、「ボクのこどもの本」と同じ構造： $[\text{名詞}] = \text{ya}^{33} \rightarrow [\text{名詞}] = \text{ya}^{33} \rightarrow [\text{名詞}]$ である。

こどもの読む本	$\text{za}^{33} = \text{na}^{55}$	$\text{k}^{\text{h}}\text{i}^{33} - \text{zi}^{55} = \text{re}^{33} = \text{ya}^{33} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}$
	こども = SFX [pl.+GEN]	DIR- 学ぶ = NMLZ = GEN 本
ボクのこどもの本	nga^{55}	$\text{za}^{33} = \text{ya}^{33} \text{yũ}^{55} \text{ndur}^{33}$
	ボク [GEN] こども = GEN	本

「チベット人の友人」(＝チベット人である友人)「漢族の友人」(＝漢族である友人)は、ムニャ語では属格助詞を用いない名詞が直接修飾する熟語化した表現である。

チベット人の友人 (友人本人がチベット人)	$\text{p}^{\text{h}}\text{u}^{33} \text{pe}^{55} \text{ɕe}^{33} \text{pu}^{55}$	$/\text{p}^{\text{h}}\text{u}^{33} \text{pe}^{55}/ < \text{Tib. } \textit{bod pa}$ ‘チベット人’
漢族の友人 (友人本人が漢人)	$\text{ka}^{55} \text{ɕe}^{33} \text{pu}^{55}$	

もし日本語のように修飾語の名詞に属格助詞 $/=\text{ya}^{33}/$ をつけると、意味が変わっ

てしまう。

cf. 漢族の友人 $\text{ka}^{55} = \text{ya}^{33} \text{ce}^{33} \text{pu}^{55}$ ‘漢族 [にとって] の友人’

日本語で「漢族の友人」というと、通常は友人が漢族であると理解されるが、ムニャ語の場合には属格助詞を使うと「漢族 [にとって] の友人」となり、その友人が何族なのかはわからない。この点は、漢語における‘漢族朋友’と‘漢族的朋友’の意味の違いの關係に平行する。「医者 of 友人」にも同じことが起こる。

医者 of 友人 $\text{mẽ}^{33} \text{mbe}^{55} \text{ce}^{33} \text{pu}^{55}$ / $\text{mẽ}^{33} \text{mbe}^{55}$ / < Tib. *smān pa* ‘医者’
(友人本人が医者)

cf. 医者 of 友人 $\text{mẽ}^{33} \text{mbe}^{55} = \text{ya}^{33} \text{ce}^{33} \text{pu}^{55}$
(医者 [にとって] の友人)

面白いことにさらに「私の」という修飾語をつけると「医者 of 友人」は {医者} {友人} の形態素の語順が入れ替わる。これは {私の} → {友人} という形態素間の修飾関係を明確化して、{医者} と同格の扱いとしていると見ることも可能である。あるいは {医者} を形容詞扱いとして {友人} の後から修飾しているとも考えられなくはないが、もしそうなら名詞句の終端を示す NMLZ の / tsur^{33} / が置かれる必要がある (次節参照) が、ここでは不要である。

私の医者 of 友人	$\eta u^{55} = \text{ya}^{33} \text{ce}^{33} \text{pu}^{55} \text{mẽ}^{33} \text{mbe}^{55}$	[分析型]
(私の友人である医者)	私 = GEN 友人 ← 医者	
	$\text{nga}^{55} \text{ce}^{33} \text{pu}^{55} \text{mẽ}^{33} \text{mbe}^{55}$	[融合型]
	私 [GEN] 友人 ← 医者	

6. 形容詞的修飾表現

形容詞が修飾語となる表現は、澤田 (2006) では名詞句を形成する要素のグループ項目として立てられていない。そもそも形容詞は、名詞を直接修飾する品詞として分類され、名詞句とは独立した形容詞句を構成する言語が少なくないことに加え、ビルマ系の諸語では形容詞と動詞に形態的な区別がないため、特に名詞句に「形容詞的修飾表現」を立てて論ずる必要がないことがその理由であろう。澤田も修飾表現のどれが名詞的修飾表現あるいは動詞的修飾表現に属するかは言語依存的なものであるとし、日本語の形容詞は動詞的修飾表現に属するものとして扱っている。

しかしチベット系の言語では、形容詞を独立の品詞として扱うべき形態的な理由があり、形容詞の修飾構造が名詞的修飾表現や動詞的修飾表現とは異なる場合も少なくない。ムニャ語においても「形容詞的修飾表現」を独立して扱うべき構造的特徴が認められる。ここで澤田の定義に倣って「形容詞的修飾表現」を規定するなら「主名詞を修飾する表現のうち、形容詞そのもの、あるいは[形容詞(句)] + [主名詞に対する関係を表示する形態素]の組合せからなるもの」ということになるだろう。

ムニャ語では、形容詞的修飾表現は、中心となる主名詞に後置され、その終端に NMLZ を置くことで名詞句となる。[名詞] ← [形容詞] = NMLZ がその基本構造である。具体的な数量を示す場合には NMLZ のかわりに [数詞 + 量詞] を置く。ムニャ語の NMLZ には、汎用の / = tsu³³ / のほかに特定用法のものが数種類ある。

厚い本	γũ ⁵⁵ ndu ³³ ri ³³ ri ⁵⁵ = tsu ³³ 本 厚い = NMLZ
大きい本	γũ ⁵⁵ ndu ³³ ki ³³ ke ⁵⁵ = tsu ³³ 本 大きい = NMLZ
古い本	γũ ⁵⁵ ndu ³³ ni ³³ mbe ⁵⁵ = tsu ³³ 本 古い = NMLZ /ni ³³ mbe ⁵⁵ / < Tib. <i>rnying pa</i> ‘古い’
cf. 3冊の古い本	γũ ⁵⁵ ndu ³³ ni ³³ mbe ⁵⁵ so ³³ = pu ³³ ti ⁵⁵ 本 古い 3 = CLF : < Tib. <i>po ti</i> ‘帙’
旧友	ɕe ³³ pu ⁵⁵ ni ³³ mbe ⁵⁵ = tsu ³³ 友人 古い = NMLZ
親友	ɕe ³³ pu ⁵⁵ ŋe ³³ ŋe ⁵⁵ = tsu ³³ 友人 よい = NMLZ
悪友	ɕe ³³ pu ⁵⁵ q ^h ʌ ³³ q ^h ʌ ⁵⁵ = tsu ³³ 友人 悪い = NMLZ

以上は単純な形容詞が直接名詞を修飾している例であるが、たとえば「背の高い友人」のように修飾語に「背が高い」という形容詞句を含む場合は、次のようになる。ムニャ語の形容詞句は [名詞] + [形容詞] の主述構造なので、単純形

容詞のついた名詞句の場合と同じように、述語形容詞のあとには名詞句の終端を示す NMLZ を付す必要がある。

値段が高い本	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33} \leftarrow k\ddot{o}^{55}$	$ki^{33}ke^{55}$	$=tsu^{33}$
(本で値段が高いもの)	本	価格	大きい =NMLZ
	/k $\ddot{o}^{55}$ / < Tib. <i>gong</i> ‘価格’		

背の高い友人	$\epsilon e^{33}pu^{55} \leftarrow q^{h\circ}o^{33}pe^{55}$	$ki^{33}ke^{55}$	$=tsu^{33}$
(友人で背が高いの)	友人	身体	大きい =NMLZ

形容詞句を名詞化して属格助詞 /= γa^{33} / により「名詞的修飾表現」と同様に主名詞の前から修飾する構造もある。

背の高い友人	$[q^{h\circ}o^{33}pe^{55}$	$ki^{33}ke^{55}$	$=tsu^{33}]$	$=\gamma a^{33}$	$\rightarrow \epsilon e^{33}pu^{55}$
(背が高いの友人)	身体	大きい	=NMLZ	=GEN	友人

しかしこちらはやや不自然であり使われにくいという。この修飾構造の違いが両者の表現においてどのような意味上／用法上の差異を反映しているのかは不明。後考を俟ちたい。このほか「ほんとうに親切的な」のように、副詞がついた形容詞句に直接属格助詞 /= γa^{33} / を附して主名詞の前から修飾する場合もある。

親友	$\eta u^{55}maa^{53}$	$\eta u^{33}t\epsilon^{hi}i^{53}$	$=\gamma a^{33}$	$\epsilon e^{33}pu^{55}$
(ほんとうに親切的な友人)	ほんとうに	親切	=GEN	朋友

修飾語となる形容詞句の主語にあたる部分には、名詞以外にも NMLZ で名詞化した動詞句が現れることがある。たとえば「わかりやすい本」(＝理解することが容易な本) という場合の「理解すること」に相当する部分が、NMLZ で名詞化した動詞句になっている。

わかりやすい本	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$	$k^{h\circ}\emptyset^{33}-k\emptyset^{55}$	$=re^{33}$	le^{55}	$le^{33}le^{55}$	$=tsu^{33}$
	本	DIR- 理解	=NMLZ	容易		=NMLZ

わかりにくい本	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$	$k^{h\circ}\emptyset^{33}-k\emptyset^{55}$	$=re^{33}$	$ke^{33}ke^{55}$	$=tsu^{33}$
	本	DIR- 理解	=NMLZ	困難	=NMLZ

/= re^{33} / は、動詞句を名詞化する NMLZ である。形容詞句を名詞化する NMLZ の /= tsu^{33} / とは置き換えることはできない。

また「ぼろぼろの本」という表現は、ムニャ語では現在の状態を描写する適切な形容詞がないため、「爛れる」という動詞を使って表現せざるを得ない。この場合には、動詞に完了の SFX (NMLZ) がついた動詞句を、形容詞のように主名詞に後置して修飾構造を構成する。

ボロボロの本	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$	$ne^{33}-pe^{55}$	$=su^{33}$	$=tsu^{33}$
(=爛れた本)	本	DIR- 爛れ	=SFX: pft	=NMLZ

7. 動詞的修飾表現

動詞が修飾語となる表現は「主名詞を修飾する表現のうち、動詞そのもの、あるいは〔動詞 (句)〕 + 〔主名詞に対する関係を表示する形態素〕の組合せからなるもの」[SWD] で、ムニャ語では、動詞的修飾語は、中心となる主名詞に前置され、動詞句の終端に NMLZ を置いて名詞句化したあとに属格助詞 $/=ya^{33}/$ を附して、中心語となる主名詞を修飾する。つまり第 6 節で見た [名詞 (句)] $/=ya^{33}/ \rightarrow$ [名詞] の構造に準じる。

昨日買った本	$jii^{33}sii^{55}$	$q^he^{33}-te^{55}$	$=su^{33}$	$=ya^{33}$	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$
昨日	DIR- 買う	=SFX: pft	=GEN	本	

「私のお父さんが私に買ってくれた本」のように、主述構造を伴った動詞句が修飾する場合には、完了を示す SFX が NMLZ の機能を担い、そのあとに属格助詞 $/=ya^{33}/$ がついて主名詞を修飾する。

私のお父さんが私に買ってくれた本

nga^{55}	$ve^{33}=ji^{55}$	$\eta u^{55}=le^{33}$	$t^he^{33}-k^he^{55}$	$=su^{33}$	$=ya^{33}$	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$
私 [GEN]	父 = AGT	私 = DAT	DIR- 与え	=SFX: pft	=GEN	本

まだ読んでいない本

[Thang mgo 方言]

$t\dot{c}u^{33}pa^{55}$	$no^{33}-dza^{55}$	$me^{55}=su^{33}$	$=ya^{33}$	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$
まだ	DIR- 読む	NEG =SFX	=GEN	本

[gSer 'go 方言]

$t\dot{c}u^{33}nu^{55}$	$no^{33}-da^{55}$	$me^{55}=su^{33}$	$=ya^{33}$	$\gamma\ddot{u}^{55}ndu^{33}$
まだ	DIR- 読む	NEG =SFX	=GEN	本

このほか動詞句の NMLZ には「～する人」を意味する形態素の / mi^{33} / がある。

裕福な友人

- (a) $[\text{dzu}^{55}/\eta\text{u}^{55}] \text{ndzu}^{33} = \text{mi}^{33} = \text{ya}^{33} \quad \text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55}$
 金 ある =NMLZ: 人 =GEN 友人
- (b) $\text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55} [\text{dzu}^{55}/\eta\text{u}^{55}] \text{ndzu}^{33} = \text{mi}^{33}$
 友人 金 ある =NMLZ: 人
- (c) $\text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55} \text{tøø}^{55}\text{mee}^{55} = \text{tsu}^{33}$
 友人 裕福な =NMLZ

(a) は動詞的修飾表現 (=動詞句を名詞化した名詞的修飾表現), (b) は動詞句の NMLZ による名詞化, (c) は形容詞的修飾表現で, いずれも友人そのひと自身が金持ちである, という意味の表現である。

(c) の主名詞を形容詞が後ろから修飾して名詞句の終端を NMLZ / tsu^{33} / で示す形容詞的修飾表現を, 属格助詞 / ya^{33} / を用いて主名詞を前から修飾する名詞的修飾表現にすると, 意味が変わってしまう (前述した第 5 節を参照)。

cf. 裕福な人の友人

- $\text{tøø}^{55}\text{mee}^{55} = \text{tsu}^{33} = \text{ya}^{33} \quad \text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55}$
 裕福な =NMLZ=GEN 友人

このフレーズは「(ある裕福な人がいて, その) 裕福な人の友人」の意である。動詞完了を示す SFX は, 動詞句の終端として NMLZ の機能を担うこともできるので, NMLZ / tsu^{33} / をさらに後置して名詞句であることを明確にすることもできるし, 省略してしまうことも可能。

昨日会った友人

- $\text{jii}^{33}\text{si}^{55}\text{k}^{\text{h}}\text{ũ}^{33} - \text{ndi}^{55} = \text{su}^{33} (= \text{tsu}^{33}) = \text{ya}^{33} \quad \text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55}$
 昨日 DIR- 会う =SFX (=NMLZ) =GEN 友人

一緒に住んでいる友人

- $\text{da}^{33}\text{la}^{55}\text{ne}^{33} - \text{ndzu}^{55} = \text{su}^{33} (= \text{tsu}^{33}) = \text{ya}^{33} \quad \text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55}$
 一緒に DIR- 住む =SFX (=NMLZ) =GEN 友人

- $\text{da}^{33}\text{la}^{55} \text{mbi}^{55} = \text{su}^{33} (= \text{tsu}^{33}) = \text{ya}^{33} \quad \text{ɕe}^{33}\text{pu}^{55}$
 一緒に 住む =SFX (=NMLZ) =GEN 友人

(ある) 久しく会っていなかった友人

[名動詞性修飾表現]

ka⁵⁵baa⁵³ tɕu³³tɕu⁵⁵k^hu³³-mẽ⁵⁵-ndi⁵⁵ = su³³(= tsu³³) = ya³³ ɕe³³pu⁵⁵ (te³³ = lɔ⁵⁵)
 ずいぶん 久しい DIR- NEG- 会う = SFX:pft (= NMLZ) = GEN 友人 (1 = CLF)

[形容詞性修飾表現]

ɕe³³pu⁵⁵ ka⁵⁵baa⁵³ tɕu³³tɕu⁵⁵ k^hu³³-mẽ⁵⁵-ndi⁵⁵ = su³³(= tsu³³) (te³³ = lɔ⁵⁵)
 友人 ← ずいぶん 久しい DIR- NEG- 会う = SFX:pft (= NMLZ) (1 = CLF)

8. 結語

ムニャ語の名詞句における修飾構造は属格助詞 /=ya³³/ を伴って主名詞に前置する名詞的修飾表現と、名詞句の終端を示す NMLZ /=tsu³³/ を伴って主名詞に後置する形容詞的修飾表現の2種類に大別できる。動詞的修飾表現は動詞句の終端に NMLZ を附して名詞化したのち属格助詞 /=ya³³/ を伴って主名詞に前置する。したがって構造的には名詞的修飾表現に組み込まれる。また、指示詞は（名詞的）修飾表現の外側に前置し、数量表現は（形容詞的）修飾表現の外側に後置される。以上をまとめると、ムニャ語の名詞句の構造は、次のように図式化できる。

[指示詞] {名動詞句 = ya³³} → [主名詞] ← {形容詞句 (= tsu³³)} [数詞+量詞]

これらの要素をできるだけ多く満たす複雑な修飾構造の名詞句を使った例文を以下に掲げる。

(4)

tsẽ³³ŋgu⁵⁵ ni³³ni⁵⁵ tu³³-ŋgu⁵⁵ = mi³³ pə³³ts^hi⁵⁵ [te³³nu⁵⁵ = zu³³ [te³³ = pu⁵⁵]]
 服 ← 赤い DIR- 着る = NMLZ: 人 小さい 1 2 = CLF [1 = CLF: some]
 ʔ³³k^hΛ⁵⁵ mu³³.
 ここ いる

赤い服を着た何人かの小さいこどもがここにいる。

(5)

ʔe⁵⁵tsu³³tsẽ³³ŋgu⁵⁵ ni³³ni⁵⁵tu³³-ŋgu⁵⁵ = mi³³ = tsu³³ ŋu⁵⁵ = ya³³ ra⁵⁵ ni³³.
 これ 服 ← 赤い DIR- 着る = NMLZ: 人 = NMLZ 私 = GEN 妹 DEC
 その赤い服を着たこどもは、ぼくの妹だ。

最後に。ムニャ語の名詞句構造のすべての要素を満たす例文として「あの赤い服を着た小さなこどもふたりはぼくの妹（たち）だ。」という文を記述したかったのだが、修飾構造を何度も繰り返して確認を重ねているうちに発話協力者が混乱してしまい、未だ確認ができていない。残念ながら今後の課題として残さざるを得なかった。本稿をまとめるのに御協力いただいたコンサルタントの忍耐に心からの謝意を表したい。

略号

AGT	Agentive	AUX	Auxiliary	CLF	Classifier
DAT	Dative	DEC	Declarative	DIR	Directional prefix
GEN	Genitive	IRG	Interrogative	NEG	Negative
NMLZ	Nominalizer	PCL	Particle	PHB	Prohibitive
pl	plural	SFX	Suffix	sg	singular
[SWD] 澤田英夫 (2006) からの引用.					

参考文献

- 黄 布凡. 1985. 木雅語概況. 《民族語文》1985.3: pp. 62–77.
- 黄 布凡. 1991. 木雅語. 戴 庆厦, 黄 布凡, 傅 爱兰, 仁增旺姆, 刘 菊黄《藏緬語十五種》北京燕山出版社. pp. 98–131.
- 黄 布凡. 2007. 木雅語. 《中国的語言》商務印書館. pp. 903–923.
- 黄 布凡. 2009. 木雅語. 《川西藏區的語言》中國藏學出版社. pp. 18–58.
- IKEDA Takumi. 2015. Causative Constructions in the Mu-nya Language. Paper presented for the 48th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics. 8/20–23/2015 at University of California, Santa Barbara.
- 池田 巧. 2015. 木雅語作格特徴. (中文) 張 曦, 黃 成龍 (主編)《地域棱鏡 藏羌彝走廊研究新視角》北京: 學苑出版社. pp. 021–033.
- IKEDA Takumi. 2013. Verb predicate Structure in the Mu-nya language. Paper presented for the 3rd Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan. 9/2–4/2013 at Paris: Centre National de la Recherche Scientifique.
- 池田 巧. 2013. 「ムニャ語の述詞と文」澤田英夫 (編)『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2: 文の特徴付けと下位分類』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所. pp. 365–390.
- 池田 巧. 2010. 「ムニャ語の格助詞」澤田英夫 (編)『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所. pp. 15–28.
- IKEDA Takumi. 2008. 200 Example Sentences in the Mu-nya language. *ZINBUN*. No.40. Institute for Research in the Humanities, Kyoto University. pp. 71–140.
- IKEDA Takumi. 2007. Exploring the Mu-nya people and their language. *ZINBUN*. No.39. Institute for Research in the Humanities, Kyoto University. pp. 19–147.
- IKEDA Takumi. 2002. On pitch accent in the Mu-nya language. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*. 25.2. pp. 27–45.

池田 巧. 1998. 木雅語語音結構的幾個問題. (中文) 中央ユーラシア学研究会『内陸アジア言語の研究』第 XIII 号. pp. 83-91.

澤田英夫. 2006. 「名詞句構成要素の分類」東南アジア諸言語研究会 (編)『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』慶應義塾大学言語文化研究所. pp. 3-4. *引用は [SWD] と略記。

TBL: 黄 布凡 (主编) 1992. 《藏緬語族语言词汇》[*A Tibeto-Burman Lexicon.*] 中央民族学院出版社.

ZMC: 编写组 1991. 《藏緬語语音和词汇》*Zang-Mian yu Yuyin he Cihui.* 中国社会科学出版社.

* 本論考は、科学研究費補助金：基盤研究 (A) 23242019 「羌系諸語の歴史と西夏語の位置づけに関する実証的研究」(平成 23 ～ 27 年度，代表者：池田巧) の研究成果の一部である。